

英語科学習指導案（研究授業）

指導教員： 先生 ㊟

実習生：古田 啓 ㊟

- [1] 対象： 高等学校 1年6組 男子19名 女子21名 計40名
[2] 日時： 平成25年6月20日（木） 第7時限
[3] 教室： 1年6組教室
-

- [4] 単元： ELEMENT English Communication 1 Lesson 3 （本時はPart3を扱う）

全4パートであり各パート2時間配当。それぞれ1パート分2時間を1つのまとまりとして扱い、本文の解説→プレゼンテーションの流れで進める。そして、LESSON3のまとめとして1時間をLesson3に関する英作文に当てる。従って単元全体では計9時間を予定している。なお本時はLESSON3計9時間配当のうち6時間目でありPart3の2時間目である。

- [5] 単元の目標

- ・文化により異なる世界の見方が生まれる可能性に目を向ける。
- ・Lesson3の内容を理解した上で、その内容に関するプレゼンテーションをすることが出来るようになる。
- ・プレゼンテーションの仕方（声の大きさ・視線・ジェスチャー）に注意することが出来るようになる。
△ “なぜそうするのか？”を生徒に伝えると良い。

- [6] 教材・教具：

教科書、ウィズダム英和辞典、総合英語 be（文法書）、パソコン（プレゼンテーションおよび音声用）、プロジェクター用ケーブル、スピーカー、教室備え付けのプロジェクターおよびスクリーン、教科書音声CD、ハンドアウト、板書計画、チョーク

- [7] 生徒の準備：

（持参）教科書、ウィズダム英和辞典、総合英語 be、ノート

（予習）Part3に関するプレゼンテーション原稿をノートに書いてくる。

なおPart3の全訳はプレゼンテーションの準備のため前時の解説のあとにすでに渡している。

- [8] 教材観と単元の内容および注意点：

このLesson3では、東洋人と西洋人の思考の違いについての英文を扱う。このLessonは4つのPartから構成されており、研究のきっかけ、最初の実験、2番目の実験、そして実験結果についての理由づけの順に内容が展開される。その中で西洋人は共通する特徴に基づくカテゴリーを重視するのに対し、東洋人は関係性や全体としての見かけを重視すること、およびそうした違いが生まれる要因としての母親の幼児に対する発話の違いに焦点が当てられている。このLessonを通して生徒には、文化により異なる世界

研究授業に対する先生方からのコメント

<良かった点>

- プレゼンの授業であってもプレゼンだけだと長くなってしまうので、パラグラフ整序を取り入れたのは変化を付けていてよかった。
- 生徒とコミュニケーションが取れていてよい。
- なぜアイコンタクトをしないといけないかなど具体的な理由に基づく話をしていてよかった。
- 指示の声など元気があってよかった。
- ペアワークもあり、生徒が実際に活動する場面を設けており良かった。
- プレゼンのための練習の順序が練られていてよかった。
- コミュニケーション良い。
- フィードバックも生徒の発言に乗っ取っていてよい。
- コミュニケーション良い。コメントも上手く返していた。笑いも起きていて良い。

<改善点>

- 練習のペア活動の時、教科書の図を指しながらやるなどより明確な指示を加えるとよい。
- 指導案の評価の観点がおおざっぱすぎる。特に（理解）の部分。学習指導要領などと照らし合わせより具体的に作るべき。
- 評価の観点の例）「人種によって理解の仕方が異なることを理由も含めて表現する」など。
- （今回はそのような生徒はいなかったが）予習・プレゼンの準備をやって来ていない生徒がいた場合の対応は？想定していく方がよい。
- クラスルームイングリッシュを使った方が良いのではないか。意味の理解などは慣れの問題で3回くらいすれば出来るようになる。また、良くできる子をクラスルームイングリッシュの浸透に利用するなど出来る。
- 誤りの指摘をする際には“大事なところは...”という表現で指摘すると間違っている！というダイレクトな指摘でなくて良い時がある。
- 作文をさせるには、まずは条件を絞った作文から。
- プレゼンにおいても英語の誤りを確認した際には、積極的に板書するなどして誤りから修正の過程・結果を“書いて残す”
- 生徒に「大きな声で」と指示をして変わっていない場合には「声の大きさが変わっていません」と指摘する。単に聞き直すだけでは足りない場合もある。
- また、プレゼンの声の大きさについてはiPadで録画（録音）して自分の声の大きさについて確認をさせる。